

# 俳人協会新潟県支部報

No. 84  
令和2年4月20日

## 新型コロナウイルス感染拡大のため、通常総会等を中止

各地域でイベント・行事が軒並み中止される中で3月15日開催を予定していた新潟県支部の総会を「中止」した。

去る3月6日に緊急役員会(支部三役・俳句大会委員長・支部報編集委員)を開催し「やむを得ず中止」の最終決定とその後の対応について協議した。協議結果は次のとおり。

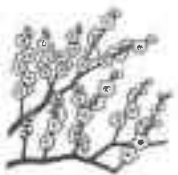
併催句会について併催句会は「通信・紙上句会」とし実施する。

6月14日開催予定の「新潟県花と緑吟行会」(加茂山公園)、7月19日開催予定の「第31回新潟県俳句大会(会場・朱鷺メッセ)」も中止することとした。

俳人協会新潟県支部  
支部長 矢澤彦太郎

### 先決処分報告

本部並びに総会時の来賓予定者からの打診もあり、会議前に先決で電話にて総会出席申込者に中止の旨周知を行ったことについて報告し、了承を得た。



## 第2回支部大賞は 村山靖子さんが受賞

### 支部大賞

隅つこと云ふは涼しきところかな

村山 靖子

### 準賞

銀杏黄葉神の言葉のやうに降る

春川 暖慕

母逝きてより天の川近くなり

大鳥いと女

### 合点賞

順位  
得点  
特選

代表句

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	順位
6	6	6	6	6	6	6	6	7	9	9	得点
0	0	0	0	0	1	1	2	2	0	3	特選
不器用に生きるも愉し衣被	瓜立ちに積み上ぐ薪や冬初め	思ひ思ひに時間を止めて枯蓮	捨てられて捨てし百姓山眠る	頬被りして朝市の人となる	ダンテイで通す長寿の耳袋	淋しくば木の實と遊べ山の句碑	白樺の粗朶も積み上げ冬用意	春光の集まつてくるペタルかな	退院の近き病窓小鳥来る	こゑもまた光をまとい小鳥来る	代表句
山本 武子	古川よし秋	川崎 陽子	久和原 賢	高柳 暁	土屋 瞳子	山口あつ子	市川 輝子	渡辺 徳治	戸田 一子	羽賀 晴子	

（選考経過概要）

第2回新潟県支部大賞は、全会員に募集し一一九名延べ三五七句の応募があった。

選考は先ず14名の選考委員より特選3句、佳作20句を選句して、その結果得点上位（5点句以上）の7句を候補作品として2月11日開催の選考委員会にて協議した。

。当日の出席委員

矢澤彦太郎・山口啓介・佐藤伊久雄・谷井野武士・山口あつ子・山之内喜七・井口光雄（他の委員は欠席、選句のみ）

。候補作品

得点	特選	句	
7	0	隅つこと云ふは涼しきところかな	村山 靖子
6	2	母逝きてより天の川近くなり	大島いと女
6	2	銀杏黄葉神の言葉のやうに降る	春川 暖慕
6	0	頬被りして朝市の人となる	高柳 暁
5	2	こゑもまた光をまとひ小鳥来る	羽賀 晴子
5	0	不器用に生きるも愉し衣被	山本 武子
5	0	冬灯硝子細工に火の匂ひ	渡辺 長子

※選考会は、作者名を伏せて行なった。  
 ※合点賞の順位で同点の場合は、受付順とした。  
 。来年度以降もこの事業を継続する予定です。  
 ぜひご応募ください。

。最終候補作品3句

各委員からの意見を集約し別表の候補作品の中から得点上位の3句に絞ってさらに検討をすすめた。その過程で、

「隅つこと云ふは……」と、「銀杏黄葉……」の句が最後まで候補対象となったが「銀杏黄葉」の句の「神の言葉のやうに降る」の措辞に賛否両論あり、「隅つこと云ふは」の句を第2回支部大賞とした。  
 なお、今回は準賞を2名とした。

。合点賞

合点賞は、支部大賞・準賞の受賞者を除く3句合点の上位者が受賞した。

第34回国民文化祭・にいがた2019  
 （第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会）

文部科学大臣賞

月の夜は良寛となる案山子翁

宮 京子

新潟県知事賞

火焰土器どこに置きても緑さす

佐藤伊久雄

俳人協会賞

良寛の恋文ほどの春落葉

井口 光雄

詩フェスティバルく花火と良寛の地をテーマとした同国民文化祭は文化庁・新潟県他各関係団体の主催のもと令和元年に開催され、県内各地でいろいろな文化的事業が展開された。当俳人協会新潟県支部も協力団体として、俳句部門における作品の募集の周知等に関わった。  
 俳句は、2781句の応募があり審査の結果、当新潟県支部からの入賞は前述のとおりであった。



紙上句会(通信方式)を実施

中止となった県支部総会の出席予定者より応募のあった併催句会の作品を対象に通信方式による紙上句会を実施。

44名延べ220句を対象に全員の互選により、15位までの入賞者を決定し

た。

なお、総会当日来賓の予定であった土肥あき子先生からも御選をいただいた。土肥先生を含めた各氏の特選句は別掲のとおり。

※順位決定については、合点上位、特選句数上位とし、なお同点の場合は一旬高点句を上位とした。

順位	合点	特選	代表句	作者氏名
1	21	3	大根のどこを切つても過疎の村	久和原 賢
2	17	2	啓蟄の流れに浸す鍬一二丁	矢澤彦太郎
3	17	1	子を抱くやうにラグビーボール受く	大島いと女
4	16	2	梅東風や神事を待てるパイプ椅子	山口あつ子
5	15	0	姿勢良きものから摘まれつくしんぼ	川崎 陽子
6	13	3	追悼のトランペットや冬銀河	小出 利恵
7	13	2	子が父になりたる電話あたたかし	関 千年雄
8	12	4	目の潤む子牛糶られて島の春	熊谷 國男
9	12	3	全山の音を封じて滝凍る	倉井 幸子
10	12	3	灯されて遠まなざしの古雛	羽賀 晴子
11	12	2	リハビリの一步踏み出す春の土	上野 昭一
12	12	2	雪踏んで母あるごとく帰りけり	井澤 秀峰
13	11	1	また一人来て白鳥を数へたる	井口 光雄
14	11	0	抱き上げて神鈴振らす初詣	森 貞子
15	10	3	風評といふ風の中種を蒔く	山之内喜七
次	10	2	花種蒔く指に伝はる土の息	水野 宗子

土肥あき子先生特選句選評

見ゆるものすべてが祈り春の山 山口 啓介

「願ひ」は個人的な思いを対象とし、「祈り」は他者への思いを対象とするもの。春は喜びとともに悲しみも引き連れてくる。雪解けの水音も、緑の芽吹きも、また甘い花の香りも、幸せであると同時に、ふたたび悲しみが訪れることのないよう、穏やかな世が続くことへの祈りに通じている。春の日差しが胸の痛みをやさしくいたわるように行き渡り、一旬に救いを与えた。

受験子のかたまり合ひて時を待つ 石黒 正勝

受験子とは同じ場所で同じ問題を解くライバルであると同時に、今日を目指して力を尽くしてきた同志でもある。不安と孤独が人恋しい心となって受験子同士を引き寄せているのだろう。にぎやかに喋るでもなく開始時間を待つ集団の緊張感と心細さがヒリヒリと伝わってくる。

花種蒔く指に伝はる土の息 水野 宗子

これから芽吹き成長する「花種」が脇役に回り、土を主役に据えたところに新鮮味を覚えた。あたたかい土の吐息が「確かに預かりましたよ」とつぶやいているかのようにも思われる。人間、花種、大地、それぞれの健やかな息吹が行き渡る。

各選者の特選句

矢澤彦太郎 選

カタログにあまたの付箋春を待つ

番場勢津子

山口 啓介 選

線量は計れぬ空を初燕

山之内喜七

川崎 陽子 選

手を振れば影も手を振る春隣

久和原 賢

井口 光雄 選

新潟に虚子の足跡柳の芽

村山 靖子

井澤 秀峰 選

すこしづつ他人めく母春シヨール

関矢 紀静

石黒 正勝 選

大きペン先より生まる春の詩

井澤 秀峰

市川 輝子 選

春暁の火の色やがて水の色

小出 利恵

上野 昭一 選

追悼のトランプットや冬銀河

小出 利恵

大島いと女 選

灯されて遠まなざしの古雛

羽賀 晴子

小野 攸子 選

リハビリの一步踏み出す春の土

上野 昭一

熊谷 國男 選

全山の音を封じて滝凍る

倉井 幸子

倉井 幸子 選

風評といふ風の中種を蒔く

山之内喜七

久和原 賢 選

鳥帰る硝子戸へ書くさやうなら

渡辺 長子

小出 利恵 選

見ゆるものすべてが祈り春の山

山口 啓介

越野 蒼穹 選

入学の子の晴れやかに前歯抜け

小出 利恵

小松 スミ 選

目の潤む子牛糶られて島の春

熊谷 國男

小山 洋子 選

立春や百万遍の鉦の音

須賀 智子

ささき万権 選

うすらひの円く離るる甕覗

越野 蒼穹

佐藤伊久雄 選

履くことのなき樫を収めけり

古川よし秋

佐藤 雄二 選

灯されて遠まなざしの古雛

羽賀 晴子

関 千年雄 選

目の潤む子牛糶られて島の春

熊谷 國男

関矢 紀静 選

海の藍佐渡を浮かせて沖霞

上野 昭一

菅井 智子 選

トルソーのあはれ乳房の朧なる

井澤 秀峰

高柳 暁 選

目の潤む子牛糶られて島の春

熊谷 國男

谷井野武士 選

灯されて遠まなざしの古雛

羽賀 晴子

土屋 瞳子 選

鳥帰る硝子戸へ書くさやうなら

渡辺 長子

寺尾亜真李 選

花種蒔く指に伝はる土の息

水野 宗子

戸田 一子 選

子が父になりたる電話あたたかし

関 千年雄

中野 太浪 選

料峭の杉玉蒼くかむなびて

越野 蒼穹

中野 弥生 選

梅東風や神事を待てるパイプ椅子

山口あつ子

羽賀 晴子 選

畝に敷く葉のふくらみ春浅し

矢澤彦太郎

番場勢津子 選

啓蟄の流れに浸す鋏二丁

矢澤彦太郎

島野 旬子 選

水温む十歩で足りる橋架かり

山口あつ子

古川よし秋 選

全山の音を封じて滝凍る

倉井 幸子

松原 南 選

風評といふ風の中種を蒔く

山之内喜七

水野 宗子 選

城跡の鬼門に出でし雪女郎

関 千年雄

村山 靖子 選

落の臺足元にある平和かな

久和原 賢

森 貞子 選

子を抱くやうにラグビーボール受く

大島いと女

山口あつ子 選

駅伝の走者に紅き冬木の芽

倉井 幸子

山之内喜七 選

また一人来て白鳥を数へたる

井口 光雄

山本 武子 選

大根のどこを切つても過疎の村

久和原 賢

横山 正之 選

目の潤む子牛糶られて島の春

熊谷 國男

渡辺 徳治 選

正解のなきことばかり春の夢

小野 攸子

渡辺 長子 選

啓蟄やところが前に向き直り

土屋 瞳子



**新役員体制について**  
 (任期) 令和2年1月1日より令和3年12月31日まで

支部長・矢澤彦太郎(河)  
 副支部長・山口啓介(野火)  
 副支部長・川崎陽子(河)  
 幹事長・井口光雄(狩)

△監事▽  
 石黒正勝(若葉)  
 倉井幸子(河)

△顧問▽  
 藤井青咲(鶴)  
 森山暁湖(風港・万象)

△幹事▽  
 山城やえ(春耕・あきつ)  
 阿部静雄(天為)  
 島野旬子(青山)  
 中野弥生(青山)  
 谷井野武士(香雨)  
 若井新一(香雨)  
 上野昭一(かまつか)  
 白澤陽子(蘭)  
 佐藤伊久雄(香雨)  
 赤塚五行(朱鷺)  
 佐藤雄二(万象)

△新潟県俳句大会 委員▽  
 委員長・谷井野武士  
 副委員長・山口啓介  
 委員・矢澤彦太郎・佐藤雄二・  
 渡辺徳治・井口光雄・水野宗  
 子・山口あつ子・中野弥生・  
 熊谷國男・平賀寛子

△支部大賞選考委員会委員▽  
 矢澤彦太郎・山口啓介・川  
 崎陽子・森山暁湖・赤塚五行・  
 阿部静雄・上野昭一・佐藤伊  
 久雄・関千年雄・谷井野武士・  
 水野宗子・山之内喜七・山口  
 あつ子・若井新一・井口光雄

△支部報編集委員▽  
 委員長・渡辺徳治  
 委員・熊谷國男  
 事務局(兼務)

※県支部事務局  
 〒九九九-七三〇二  
 南魚沼市浦佐三五八六一-六  
 井口 光雄

〒〇二五(七七七)三二〇六

※俳句大会・事務局  
 〒九五〇-〇二〇八  
 新潟市江南区横越中央一  
 五-一

谷井野武士  
 〒〇二五(二八五)三五〇七

※「支部報」編集部  
 〒九五一-一八〇六七  
 新潟市中央区本町通八一三〇九  
 一三〇五

渡辺 徳治  
 〒〇九〇(七七五)三二〇五

**【お願い】**

支部号掲載の希望などあ  
 りましたら、ぜひ編集部に  
 ご連絡を頂くと有難いです。  
 随時、原稿をお待ちしてお  
 ります。会員の高齢化に伴  
 い、支部会報の原稿依頼が  
 困難になっています。会員  
 の皆様のご協力をお願い致  
 します。

**私の吟行地**

**佐渡の海**

菊池美星

私の好きな吟行地は、佐渡  
 の海です。特に好きなのは波  
 の花の季節の海です。  
 波の花は、佐渡の外海府地  
 域や真野湾でよく見られます。  
 荒波が白い泡状になり強風に  
 吹かれ、花びらのように漂う  
 様子は極寒の佐渡の風物詩で  
 す。

**句会報**

「庭」本部句会

令和2年2月15日(土)  
 会場・広神コミュニティー

春灯のどれかひとつは介護の  
 灯 大島いと女  
 雪解川越後平野を独り占め  
 皆川 捷巳

山茶花や心を決めて髪を切る  
 住安 安子

目覚めたるねんねこ温し子の  
 瞳 佐藤 良信

梅見ツアーコロナウイルスを  
 懸念せり 佐藤 昭子  
 雪囲されてしまひし案山子か  
 な 星 美也子

駅員の除雪待機や握り飯  
 大島 詠志  
 春満月忍者の如く猫走る  
 山本 浩

日の香入り膨らみ嬉し千蒲団  
 佐藤 健

日脚伸ばあつけらかんと死ぬ  
 山本 美代  
 隙間風ほどに窓開け外出す  
 林 道子

遠き子の声ほしき日よ春の雪

気温が2度以下、約7メー  
 トルの風速、波がやや高く荒  
 れていることが波の花の生ま  
 れる条件だそうです。いつで  
 も見られるものではないので、  
 見ることができたら幸運です。  
 日本の美しい超自然現象で、  
 吟行を楽しんでみてはいかが  
 でしょうか。  
 まだ見たことのない方は、  
 どうぞおでかけください。暖  
 かい服装をお忘れなく。また、  
 寒齣のおいしい季節でもあり  
 ます。併せて、楽しんでいた  
 だきたいです。

羽賀 晴子  
初氷踏みしだく児の一途なる

本多 義堂

振り向かず手を上げて行く冬帽子

高橋 満

魚沼に雪のない寒明けにけり

山之内喜七

(山之内喜七・報)

「風港」新潟句会

令和2年2月15日(土)

会場・小千谷市勤労青少年ホーム

青空が庭まで下りて梅開く

星野ヒロ子

立春の日矢に射られし古畳

佐藤 捷司

新調の靴跡しるき春の雪

宮田 義石

離れて見寄りて見つむる寝釈

金子 功

迦かな

岩淵フジノ

寒灯や筆下の呼吸整へる

宮田 悦子

汲み置きの水を飲む猫寒夜か

な

露坐仏の慈悲の眼や梅日和

五十嵐賢二

一服の山水画なり棚霞

吉澤 義章

腰痛の夫大声で鬼の豆

横森 宏子

カリヨンの天よりひびく深雪

森山 眺湖

(森山眺湖・報)

「つばくろ句会」

令和2年2月4日(火)

会場・燕市中央公民館

◇

次々と家族に替はり初電話

丸山 賀子

煮凝りに透くる花絵の伊万里

皿 関矢 敦

トラクター打ち代追うてかけ

ろひぬ 山川 草木

繋がるる船如月の時化やまず

金子 和久

門灯の光にゆらぐ春の雪

吉田千代美

虎落笛とりつく厨の出窓かな

真嶋 陽好

夜汽車にて憚るやうに咳ひと

つ 相場 祥子

白梅紅梅坂道の行き帰り

田中田鶴子

夜通しの風おさまりて根深汁

杉山 広子

人待ちの無人の駅や冴返る

野島 正子

神々の山に餅し斧はじめ

矢澤彦太郎

(矢澤彦太郎・報)

新潟野火句会

令和2年2月9日(日)

会場・加茂市「貴布禰」

◇

凍滝や風のかたちをそのまま

山口 啓介

今にある火の見櫓や出初式

大越 千代

硝子戸の薄日むさぼる冬の蠅

佐藤 とよ

駄菓子屋に声の戻れる三日か

な 旗本 春美

風揚や時空の曲がるところま

で 土屋 瞳子

蜜柑剥く昭和を語る姉妹

渡辺セツ子

年新た台本なしの幕上がる

戸田 一子

朽ちかけの倒木いだき山眠る

番場勢津子

八海山一天にあり凍の朝

小池 日子

遠嶺に鷹翻り晴れ渡る

渡辺 長子

子が先に石段上る初詣

酒井 道子

読み返すこれで最後といふ賀

神田 絹子

初釜や花葩餅の紅透けて

村山 靖子

小京都と呼べる町の暮早し

大橋 節子

年新た両手振りふり歩きけり

長谷川 道

明日来る客は長身布団干す

番場ノリ子

数へ日の肉に絡める塩麴

熊木志津子

煙立つ煙突二つ初山河

渡辺 啓子

夫癒えてわれも気合の年用意

塩野 紀子

野良猫に唸る家猫雪催

菅家恵美子

おでん鍋種の太つてあふれけ

り 高橋 ヤイ

新しき肌着を揃へ初湯かな

杉江 典子

おでん鍋つつく小さな箸ひと

つ 長谷川眞一郎

米寿へと未知の歳月初明り

山口あつ子

(山口あつ子・報)

玉 菊池 武美

初春や絵馬をはみ出す志望校

藤田 ゆき

能管の澄みし響きや寒の月

仲田しげを

初釣りやいつもの海に一札す

長部 憲忠

鯛の身のうすくれなるや寒の

水 田中みちこ

元朝の銅鑼に明けたる佐渡航

路 畠山 美緒

どんどの火爆せて寒村華やげ

り 鶴間美和子

右傾ぐ癖は母似や初写真

金子よし子

朱を引きて朱鷺の十羽の初景

色 中村 梨枝

ふうふうのあとにはふはふ牡

蠣鍋よ 菊池 美星

さかしほを効かすお稲荷女正

月 松本 明子

読初は書架の真ん中師の句集

浜田 萱草

※新型ウィルスの感染が懸念

され、大会は中止となりまし

た。(赤塚五行・報)



### 推敲は必要最小限

矢澤彦太郎(河)

俳句を作る上で大切な要素として推敲がある。句会等に出句する時、二度、三度と推敲を重ねることは誰もが経験することであり、急な席題の時などは推敲不足になることもある。十七音の短い韻文であればこそ推敲の大切さが指摘されるのである。

では具体的にどうやって推敲を重ねてゆけば良いのだろうか。以下私なりの推敲基準によって私見を列記する。

・先ず声に出して読む

作句したものを声に出して読むと自ずからの句の調べやリズムなどの良し悪しが解ってくる。句会での披露の大切さもそこにある。

・表記は適切か

書いたものを眼で確かめて見る。誤字脱字はないか、漢字とひらがなの組合せによって句のたたずまいが見えてくる。表記を変えてみる事も大切な作業である。なお「ひらがな」だけの名句もある。

「をりとりてはらりとおもきすすきかな」飯田 蛇笏

・切字の効用と「てにをは」の助詞の使い方

俳句は切字で決まるとも言われているが正に至言である。

「霜柱俳句は切字響きけり」石田 波郷

名句は季語と切字によって決まると言っても良いだろう。それだけに安易に使ってはならない。推敲を重ねるうちにその句に相応しい切字を見付けることが肝要である。

また句と句を繋ぐ「一字」の助詞によっても句の良し悪しが決まる場合が多くあることと心に留めることが大切である。

「山里は雪くる頃か牡丹鍋」

「山里に雪来るころか牡丹鍋」

・季語(季題)は適切か

季語は俳句の中心を為すものであり季語あってこそその俳句である。それだけに慎重に考えを重ねて季題として、その句に適切であるかを見極めて作句することも大切である。

「畝に敷く葉のふくらみ春浅し」

「畝に敷く葉のふくらみ鳥渡る」

掲句は下五に春と秋の季題を置いた句であり、季語が動く句の典型であろうか。一句として読めば余り違和感を感じないが、要は季語が動き易いような内容の句を作句しないことが肝要である。

いづれにせよ作句は頭や理屈で作るものではなく、物や景に作者の思いを込めて十七音に託すのである。従って推敲は必要最小限に留め置くことを、心にかけて作句すべきものと思っている。

### わたしの推敲手

### 季語の説明になっていないか 山口啓介(野火)

私の推敲手順という、もっとも苦手な課題である。もともと一句の成立にあれこれ推敲した覚えは少ないのが現実である。

要するに一発勝負というのが、私の作句方法であり、後であれこれの手直しは少ない。訂正はしょっちゅうあるが、推敲すると理屈が先行し、直感というか、感性が薄れてしまうような気がするからである。

一字の違いが本趣から外れ説明になる場合も多い。

ただテニオハの効果は俳句の生命と思っただけに、幾度も書いては消すの訂正は日常茶飯事である。

ただ季語の幹旋は俳句である以上絶対の条件であろう。

季語に添って心情を詠む場合。季語というか自然を詠む場合がそうであるが、特に季語を後付けにするような場合は季語が生きているか、ただの付出しに過ぎていないか神経の集中が求められて来る。要するに季語が動くかどうかである。季語の幹旋によって、がらりと句意が変わってしまう事も多い。些細なことではあるが例として、「春の雷」と「春雷」は印象が違って来る。

一句の響きが異なって来るのである。一つの季語でもこうなのであるから、そこらあたり、何度も口誦してみることも必要であろう。

季語を詠む場合は、まず類句がありはしないかの検証が必要であるが、有名句ならともかく、数多ある句など覚えられないはずがない。また季語の説明になっていないかが決めどころであり、絶対必要な推敲条件の一つであろう。

数少ない私の推敲例を挙げて貰いたい。

原句「春月に梢芯から濡れてをり」

推敲「春月のひかりを浴びて木々疼く」

「春月」「ひかり」は重複の感は免れないが、どうしても「木々疼く」が言いたかったのである。

原句「噴水の高さ崩れてちりぢりに」

推敲「噴水の高さの折れて霧散せり」

「崩れて」と「折れて」の言葉の幹旋に迷いはあった。

原句「酔へば唄ふ師の懐しき山桜」

推敲「酔へば唄ふ師のありにけり山桜」

師は齊藤美規先生である。句会の後の酒の席で必ず「予科練」を唄っ

た。「懐しき」より「ありにけり」に推敲。

## 織細に大胆に楽しく

川崎陽子(河)

推敲に関する講演や記述などは古くからあふれるほどあるが、いづれもほとんど同じような内容であり同じような考え方で「今更」という気がする。がこの課題を与えられたことを機会に自分の推敲の仕方を振りかえって見ることも一考かと思ひ今回の依頼を受けることとした。

句は残す

せっかく作った句を気に入らないからといって捨ててしまわずに書き残して置く。その時どんなに駄句だと思っても時間がたつてから見ると「この一字を『の』にして上五と下五を置き替えて」みたら思いがけぬ佳句へ生れ変わるなどということもあるから。

あきらめる勇気

やっと思いついた「これだ」という言葉やフレーズにはつい溺れてしまふ。そしてそれを残すために大事な言葉を削ったり余分な言葉を足したりしてリズムまで狂わせてしまうことがある。そんな時は思いきって「これは」をあきらめる勇気が必要と思ふ。

明暗の塩梅

ある著名な俳人が「人情話的句を作るのは女性に多くそれを読んで共鳴するのも女性に多い」とどこかに書いていたが、甘すぎる句や暗すぎる句には感動をおぼえることは少ない。この塩梅が難しいのだが何回も読み返すことである程度解決する事が出来る。

季語が命

「結論が出てしまつたり説明している句」には「季語」の助けが必要である。「季語が適切かどうか」には最も神経を使う。そのための推敲の時間は決して惜しまない。ぴつたりくる季語に出会いその季語が語ってくるのを待つことが大切と思ふ。

類想感からの脱出

私は冷類想感からの脱出に力を注いでいる。自分の句で恐縮だが「古井戸に蠢くものある残暑かな」が原句。どうも中七がありふれて類想感もあり気に入らない。そこで「古井戸の底にしやがんでゐる残暑」としてみたらず類想感から逃れることが出来た。

拙い私の考えを述べさせていただいたが、もう一言加えさせてもらうなら「多読」をする事である。それも有名な俳人の句ばかりでなく手当たり次第読み、そして自分なりに推敲を試みる。これが案外楽しいのである。楽しくなければ継続しないというのが私のモットーだから。

## わたしの推敲手順

## 推敲は客観的に見れない 井口光雄(春野)

自分の句を修正することを「推敲」。他人の句を手直しすることを「添削」という。

推敲と添削は同じ作業であるが、気持的に少し異なる。つまり「推敲の作業は添削のように客観的に見れない」という気持をぬぐえない。自分の句への愛着がどうしても推敲の目をくもらせてしまうのである。これは俳句大会や句会に投句するときの自選と、選者として他人の句を選句する時の目と似ているところがある。

それでは「私の推敲手順」であるが、まず、原句になる前の作業から話をすすめてみたい。

句材を見つける

①「これは句になる」と思われる「物」「言葉」などを見つけ出す。この句材の見つけ方で佳句になるか、並みの句で終るか、ほぼ六割七割程度決まるように思う。

②見つけた句材で、「とりあえず五・七・五」に仕立てる。

③さあ、ここからが推敲の作業となる。そのチェックポイントは次のとおり。

季語が適切か

季語は一句の成否を左右する最も大切な要素である。季語が動かないか、季重なりになっていないか等がチェックポイントとなる。

言葉の省略は適切か

無駄な言葉、不必要な言葉はないか。逆に必要な言葉を抜かしていないか。

切れ(切れ字)はあるか

十七音という短い詩型では、「言葉の省略」と「切れ」は、句の情景の幅と奥行きを広げる上で不可欠である。

一句のリズムについて

不必要な字余りや字足らずなどでリズムを悪くしていないかもチェックポイント。

さらに語順(言葉の順序)を入れ替えることにより不用な助詞を省くことも出来るよう。

その他「漢字とひらがなの表記」についても一工夫が必要である。

「推敲」それは、読み手に対し「どんなところ(感動)を伝えたいのか。そのための修正が推敲である。

最後に実際の推敲例から

草餅を通して父母への思い出を、そしてその恩を詠みたいと作った句の推敲

初案 草餅の湯気やはらかに搗き上る

推敲 草餅の草やはらかに搗き上る

成句 草餅の草よりも濃く搗き上がる



今年米

大島 詠志(庭)

空き家にも手抜き結びの雪囲  
根雪とふ閉ぢし母校のスローガン  
雪搔の無言の境継ぎしまま  
冬至日の同じ音する券売機  
短日や握り返すも病ひの手  
幾度も妻の数へる今年米  
稲の香のまま散髪の椅子に座す

ピアノ曲

金子よし子(朱鷺)

筆はじめ孫の一人は左きき  
裏おもて墨字の賀状墨にほふ  
手毬一つ形見の色となりしかな  
水温む遺品の箱に母の文字  
春の虹なな色数へ終はるまで  
初音聞く朝の心の豊かさに  
陽春の海へ溶けゆくピアノ曲

蕎麦搔

中村 昭義(百鳥)

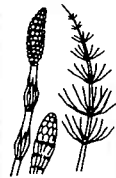
稲の出来見るAIと雀かな  
堤防に残る温みや夕月夜  
浄瑠璃の一座と島へ秋の航  
碧眼の太郎冠者ゐる文化の日  
冬田道長き園児の列の来る  
霜の夜や象と菩薩の光り出す  
蕎麦搔や初めて逢ひし時のこと

夏つばめ

古川よし秋(汀・銀化)

重箱を裏返し乾す小正月  
左義長の点火の法螺を村へ吹く  
研ぎ終へし刃を裏返す夏つばめ  
一行を継ぎ足す日記稲の花  
鍵穴の冷え手探りの冬銀河  
踏ん張りのきくうち農の日記買ふ  
寒肥を撒く土の香の肥沃かな

私の近詠



『私の近詠』は、原則として、  
アイウエオ順に掲載。(編集部)

北帰行

大橋 節子(野火)

薔薇園に昭和五年の鉄道車  
実年齢よりシャキシャキの敬老日  
厄日来るリュックのグッズ点検す  
案山祭町の一人の顔として  
加茂川へ鮭の遡上や水ひかる  
馬鈴薯の芽をかく雪の来る前に  
北帰行近き白鳥羽搏ける

桃の花

関 矢紀 静(河・雲)

どの家も風を入れたり桃の花  
牛の目のかくも黒々植田風  
船虫や一斉送信完了す  
神体の何やら不明秋澄めり  
灯を消してちちろの闇の近づきぬ  
どこまでが海か刈田か日の暮るる  
うたた寝の大根煮えるまで焦げるまで

踏ん切り

浜 田 萱 草(朱鷺)

客の来て犬も驚く残暑かな  
点景に朱鷺の二三羽稲穂波  
放棄田と刈田のあはひ愁思かな  
取りあへず借りる十冊年の暮  
踏ん切りをつける初旅風の朝  
春泥を踏んで大人になつてゆく  
街並の保存通りや享保雛

令和二年

村 山 靖 子(野火)

吊皮の師走遠心力に耐へ  
新巻の憤怒の相の売られゆく  
立ち止りメモを見てゐる歳の市  
下足札いろはにはへと年忘れ  
餅焼きて令和二年の始まりぬ  
一碗の中の宇宙や初茶の湯  
初釜や花葩餅の紅透けて

## 事務局だより

幹事長 井口光雄

◇新型コロナウィルス感染拡大のため、支部総会は中止となった。これにより別記報告のとおり、総会における各議案の議決承認は後日開催の幹事会に一任させていただくこととなったので会員の皆様には、非常事態における特別措置”としてご理解いただきたい。

◇本年度の総会・併催句会の申込者は44名であった。ちなみに昨年度は53名であり、コロナウィルス関係も影響したように思う。

年度の切り替え早々に出鼻をくじかれたような感があるが、吟行余！  
 俳句大会と事業を順次すすめる予定であるので会員各位のさらなるご支援、ご協力をお願い申し上げます。  
 ◇令和元年度（含・平成31年度）も県支部の会員増に取り組み、13名の新会員をお迎えすることが出来た。このことにより、3月1日現在の会員数は、過去最高の175名となった。新会員各位は次のとおり。

(受付順)

金子よし子(佐渡市・朱鷺)

関矢 紀静(長岡市・河)

番場ノリ子(加茂市・野火)

松本 明子(佐渡市・朱鷺)  
 大橋 節子(三条市・野火)  
 長谷川 道(加茂市・野火)  
 中村 昭義(新潟市・百鳥)  
 間 恵子(新発田市・田)  
 丘 のぼる(新潟市・銀化)  
 川久保妙香(妙高市・ゆめ)  
 大島 小春(上越市・愛媛若葉)  
 小野日奈多(長岡市・銀化)  
 山田 晴女(妙高市・汀)  
 (注)小関等氏は都合により入会後、退会。

◇昨年の豪雨災害・今冬の異常小雪そして、新型コロナウィルスの感染拡大と百年単位で起きるような非常事態が次々と発生している。正に“地球が病んでいる”ように思えてならない。俳句を愛する私たちは、ささやかながらも今後も自然を愛しみつつ俳句を詠んで行こうではありませんか。



## (編集後記)

県支部報第84号にご多忙のところご寄稿いただいた執筆者の皆様により感謝申し上げます。

温暖化の影響かどうか不明だが今年の桜の開花はどこも早くなっている。東京では靖国神社の標本木が3月14日に開花した。これは統計開始以来、最速の開花日である。彼岸前に東京の染井吉野が開花することは珍しいことだ。

今年の花見は新型コロナウィルスの感染拡大防止のため宴会などが自粛されるので静かな花見となるだろう。たまには心静かに悠久の自然の中に身を置き咲き散ってゆく花の輪廻転生に思いを致し、花の一句を詠い上げることが有意義なことだと思おう。

首都東京が感染爆発という危機的状态に陥った。都民のみならず国民一人ひとりの感染拡大防止に向けた強い自覚が求められている。

(熊谷 國男)

今回の特別企画、「わたしの推敲手順」は如何でしたか？先回は「選句基準」でした。「推敲手順」は執筆者にとって「選句基準」以上に難しかったようだ。何故なら「推敲」と「選句」は、形式は同じですが立場逆転だからである。「推敲」は主観的に、「選句」は客観的になる。人の「あら」は良く見えるが、自分のことは自分で分らない。俳句でも同じか。直す句が「自己」と「他者」で大違い。人の句の評価は微に入り細に入りわかる。私の句を何で評価してくれないのか？何故私の句を取ってくれないのか？人から選評されると、私はこういう風に「見た」「感じた」「思った」と長々述べる人がいる。つい言い訳したくなる。しまいには自分の句の「自己賞賛」に酔ってしまう人もいます。ボールはすでに「選者」の手に委ねられている。「推敲」の時期も、自分の句をある程度時間を置いて、「自己賞賛」の薄れた時期にもう一度見直すのも一考。逆に締め切り時期に迫られた時の「瞬発力」の効果もあるかも。むずかしい。

(渡辺 徳治)